

---

# 地デジ少女 應用編

沙月涼音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地デジ少女 応用編

### 【ZPDF】

Z4799T

### 【作者名】

沙月涼音

### 【あらすじ】

地デジ完全移行まであと僅か。

ひょんな事から手に入れた「地デジ内蔵ドールのリオ」

そのリオとの奇妙な共同生活の第一弾！

寝返りをうつと、何とも心地よい良い匂いがした。そして、柔らかい手触りのモノが。

「ん、うーん」

ゆづくと目を開けると、そこにはリオが俺の傍で添い寝をしていた。

「リオ？」

「アハ、おはようございます。」主人様

「ん、ああ、おはようリオ」

リオが俺のモノになつて既に十日余りが過ぎていた。独り者の俺には、今までとは考えられない日々だった。本気でドールを好きになりそうだ。

枕元にある目覚まし時計に目をやつた。大きなベルが上に二つ付いてる時計の針は、十一時半を少し過ぎていた。

「十一時……か」

「あのう、今日はお休みでしたので起こすのを控えたのですが……」

「迷惑でしたか？」

「あ、いや、いい心がけだぞリオ」

「ありがとうございます」

そう言つて、リオは俺に寄り添つてくる。ああ、幸せとまつづき事をいうんだなあ。

「……」

「何か？」

「服はどうした」

「私、寝るときは裸が基本なんです」言い切るリオ。

マジかあ、そりや柔らかいモノもあたるよなあ。とは言え、このままでお昼まで惰眠を貪つてしまいかねん。これからもリオとは一緒にのだし、俺はひとまずベッドから出ることにした。そして、

確かに昨夜はタイマー録画するためにリオはレコーダーに接続してい  
たはずだが……まあいいか。

俺はテレビの下にあるレコーダーに手を伸ばした。録画したであ  
りう格闘技を見ようと思ったからだ。レコーダーのリモコンを使い、  
HDDの中身を確認してゆく。が、らしきモノが見当たらない  
確かにタイマーはセットした。もしかして時間を間違えたか？ 俺  
ならありえる、以前に時間とチャンネルを間違えて天気予報だの地  
方ニュースだのを撮つた事もあつたし。リオの方へ視線を移した。  
上半身を起こし胸を露わにしたりオが、「ん？」と俺の視線に小首  
を傾げて微笑む。か、可愛い……いや、そうじゃなくて、今は録画  
したかどうかが問題なのだ。

「リオ？ ちょっと聞きたいんだが」

「何でしょう」主人様

「昨夜予約した番組が録画されてないようだが

「はい？」

「寝る前にタイマーセットした格闘技だよ」

「えつと……あははは

「笑つて誤魔化すな！ 一体どうしたんだ？」

「だつてえ」

言いながらリオはベッドからするり身体を抜き出し、俺の元へ擦  
り寄つて來た。当然素っ裸のままで。窓から差し込む日差しが、リ  
オの白い肌を一層綺麗に照らし出していた。

形の整つた乳房、ぐびれ腰……きゅつとしまつたおしり、完璧な  
プロポーションで俺に迫つて来る。

「セツトした時間は夜中の2時半ですよ」

下から見上げ、甘える様にリオが言つた。

潤んだ瞳に、濡れた唇……つづくづく思うが、本当にドールか？

くそ、負けそうだ。だが、そういう訳にはいかん。何せ昨夜の  
格闘技はレアな試合が組まれていたのだから。

「だからタイマー録画にしたんだが」

「えええ～そんな時間に、私一人で起きて録画しわざで言つんですか？」

「はあ？」

「だからあ、丑二つ時ですよ。草木も眠るつていうむ、胸を擦り付けるな」

「真つ暗な部屋で、私一人が起きるだなんて……酷いわ」涙を一杯に溜め俺を見詰めるリオ。タイマー録画出来ないタイム機能の方がよっぽど酷いんじゃね。とは言え、裸の美少女が俺に擦り寄つてきているのだ、腑抜けになるのも仕方ないといものだ。はあ……で、録画しないでベッドに入つてきたって訳か？」「

「いえ、録画はちゃんとしました」

「言つてる意味が分からん。実際俺がセツトした番組は録画されてないぞ」

「そんなはずないですよ」言しながらリオがレコードのリモコンを俺から取り上げた。

慣れた手付きでナビ機能を使いリストを検索している。程なくして

「あ、これです」

「ん？」

リオが二コ二コした顔で示した番組は、ニーケ特集だった。

「えつと、何だこれは？」

「やはり、教養は必要かと思いまして」

「教養つて……」

そりや大人になつたら勉強とは縁遠くなるが、俺つてそんなにバカそうに見えるんだろ？

「お気に召しませんか？」今度は不安そうな表情になるリオ。

「あ、いや「レはこれで良いんだが俺が本当に見たかったのは格闘技で」

「そんなん、やっぱりご主人様は私の事お嫌いなのですね」

「ちょっと待て、何でそつなる」

「だつて、ご主人様は私に夜中起きて一人寂しく録画しろって事なんですね？ と言う事はそれ自体が嫌がらせ、故に私の事が嫌いって事に他ならないです」

「何でそんな解釈になる？ つか、付いている機能を使おうとして拒否されている俺は一体どうしたらいいんだ？」

「じゃあ逆に聞こう。何時だつたらタイマー録画してくれるんだ？」

「そうですねえ」

リオは俺から離れる、と同時に白い乳房がブランと揺れた。未だ裸のまま何処も隠すことなく目の前で正座し、視線を遠くに持つて行つた。

同時に俺自身も視線を遠くへとやつた。

「と、取り敢えず服を着ろ」

「あ、ハイご主人様」

ひらひらで可愛いメイド服に着替えたリオは、改めて俺の目の前で正座した。いやあ、何時見ても可愛いねえ。  
「で、話の続きだ。何時なら大丈夫なんだ？」

「L.O.は23時半位でしょうか」

「L.O.？」

「あ、ラストオーダーです」

「おいおい、ここはファミレスか何かか？ まあいい、取り敢えず

全部聞こう。

「朝は6時位、寝不足はお肌の大敵ですから。うふふ」

「お肌つて……」

寝不足とかすつと肌荒れとか起こすつて事か？ てか、夜中の番組は根こそぎ録画不可能つて事かよ。そりや困るぞ！ 見たいアニメだつてあるし、F-1なんぞ毎回夜中確定。どうする俺。それより、リオが寝ると地デジは見れるんだろうか。

「なあリオ」

「何でしちゃうか、『ご主人様』

「リオが寝てると、テレビは見れるのか？」

「基本的に見れないです」

あつさりキッパリ言うなこの子は。録画も出来ない挙句、視聴も出来ないのか？夜中の番組総崩れって事か？それは断じて許されないので。そりや結果はネットでも確認出来るが、過程も見たいのがファン心理つてもんだ。

ラストオーダー……ちょっと待てよ。って事はだぞ。

「なあリオ……」

「はい？」

「ラストオーダーって事は、その時間までに予約すれば録画してくれるって事だよな？」

「えっと、まあそういう事になりますね」

「じゃ、その時間までに夜中の番組を予約したら大丈夫って事にならないか？」

「それは無理です」

涼しげな顔でリオは言つ。

何故だ！ 本来ラストオーダーってのはそうじやないはずだ。

「何故」

「だつて、私が寝てるから」

「ちょっと待て、そりゃどう言つ事だ」

「ん~どっちかと言えば、活動限界時間に近いかも。えへ」

何じやそりやあ。『えへ』って何だよ！ 可愛いじやねえか！

じゃなくて。活動限界つて、おのれは某戦闘兵器かよ。てか、地デジチューナーとしての役目は何処に忘れてきたんだよ。そりや夜のお供は完璧なんだろうけど、俺は付属の機能も完璧であつてほしいのだよ。もしかして、一兎を追うもの一兎も得ずつてやつか？ いや、買つた時は一石二鳥的な感じだったぞ。

「あのう、『ご主人様』？」

「ん？」

頭を抱えて悩む俺に、リオが声を掛ける。

「どうしてもと言つのであれば、解決する方法が一つありますけど

「ホントカリオ！」

何だよ、ちゃんと録画出来る方法もあるんじやないか。暗闇に閉ざされそうになつた俺の心に、一筋の光が差し込んだ。そんな気がした一言だった。

「ハイ。でも、ちょっとど「主人様の協力も必要なんんですけど」する。録画出来るなら、何でも協力するぞリオ」

「ありがとうございます」

深夜2時。

「で、これが解決方法だつて事か？」

「ハイ、ご主人様」

その笑顔には一点の曇りもなく晴れやかだつた。悪気はないのだろう、怒る気も失せるくらいだ。

今から十数分前。俺は自分の名前を呼ばれると共に、身体を揺さぶられる感覚に襲われ目を覚ました。重たいまぶたを開くとそこにはリオの顔があつた。「良かつたあ、やつと起きた」と言わんばかりの顔でだ。

「どうしたリオ？」

「録画時間が迫つてますよ」

「はあ？」

まだ寝ぼけていた俺の思考能力は半分も動いてはいない。薄暗い部屋の中で、リオの顔が間近にあると言う事が感じられるだけだつた。

「早く起きてくださいご主人様。」ちりも起こしますからあ

「……うつ」

甘い声を出したかと思うと、リオが俺の息子を刺激しだした。

「「」主人様あ」

悲しい男の性なのか、俺の意識よりも早く息子がむづくりと起きだすのが感じられた。流石、その方面でも逸品のドールだ。 と、感心している場合ではない、気持ち良くて一層意識が遠のきそうだ。「「」主人様あ、寝ちゃダメですよお。」」ひねりけむりやんと起きたのにい

「はう「

更なる快楽が俺の身体を駆け抜けた。このまま快楽に身を任せてもいいと思ったのだが、今は何故リオがこんな時間に俺を起こすのかそれを確認するのが先決だった。

「何だリオ、こんな夜中に

「先程も申しましたが、録画時間が迫っていますので起きてください

「はい?」

そんな訳で、俺達は一人仲良く夜中に並んでテレビの前に正座していた。まさか、唯一の解決策が時間になつたら一緒に起きて録画する事だつたとは。安易に協力するなんて言わなきやよかつた。新婚家庭の目覚ましだよなあこれじや。

「ほら、後三分で始まってしまいますよ

「おっ、そつか……」

レコードマーの録画ボタンに手を伸ばして、俺は躊躇した。何故つて? そりやリアルタイムでこれから見るので、録画する意味があるのかと思ったからだ。

「どうかなされましたか?」

怪訝そうに俺の顔を見るリオ。

「あ、いや、録画する意味あんのかと思つて

「そんなん、折角起こしたのに。私の努力を無駄にななぐる気ですか?

「いや、そんなんつもりは無いが?」

「じゃあ、録画してください」

「だから……」

「録画しないなら、私寝ちゃいますよ」ふて気味にリオが言った。

「ちょっと待て、何故そつなる」

「ここで寝られると非常に困ったことになる、何せリオが起きていないと録画はおろかリアルタイムですら番組が見れないのだから。

「じゃあ録画して下さるのですね」

「ああ……」

俺は半ば仕方なく録画ボタンを静かに押した。同時に赤いLEDが点灯しHDDの容量を減らしていく。

一時間少し過ぎた頃、急激な眠気に俺は襲われた。横をチラリ見る限りは平然と画面を直視していた。俺の視線に気がつくと、リオは小首を傾げ。

「どうかされましたか？」ご主人様

「あ、いや。リオは眠くないのかなと思つて」

「そりや眠いに決まってるじゃないですか」

「え？」

「だいだい……」

身体の向きを変え、右手人差し指を前後に振りながら、リオの愚痴が十数分続く事になつた。「眠くなつた」なんて事を言わなくて良かつたと俺はつぐづぐ思つた。そんな事を言おうもんなら、数時間に及びかねないからなあ。

「ちゃんと聞いてます？」

「お、おう聞いてるぞ」

「なり、いいんですけど……それでですねご主人様

「まあまあ、それ位にして今は一緒にテレビを見ようぜ」

「ご主人様がそうおっしゃるなら」

渋々承諾するリオを、俺はゆっくり優しく傍へと抱き寄せた。

「あん、ご主人様」

「リオ」

目を閉じるリオ。

僅かに濡れた唇が迫つてくる。俺はそれに応えるように抱きしめ、ゆっくりと顔を寄せた。

「……ご主人様」

その場で俺達は身体を重ねる。

ブチッ！

結構な音と共にテレビ画面が消えた。

「へ？」

俺は我に返つた。

しまつた！ リオを接続したままだつたつ！

「（ご）主人様あ。つ・づ・き……チユツ」

結局この夜、見たかった番組はクライマックスで見逃し。無論、録画も同様の結果になつたのは言つまでもない。つづづく、男つてやっぱバカな生き物だと再認識した瞬間だった。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4799t/>

---

地デジ少女 応用編

2011年5月22日20時25分発行